

【事例紹介】

「アジア高校生架け橋プロジェクト」

-1,000人の留学生が日本の高校に留学する意義とは-

ASIA KAKEHASHI Project:

Building Bridge between High School Students in Japan and Asia

公益財団法人 AFS 日本協会アジア高校生架け橋プロジェクトチーム 若生 麻衣

WAKOH Mai

(ASIA KAKEHASHI PROJECT Team, AFS Intercultural Programs, Japan)

キーワード：アジア高校生架け橋プロジェクト、異文化理解教育、多文化共生

プロジェクト概要

2018年4月、AFS日本協会（以下、当協会）は、文部科学省「アジア高校生架け橋プロジェクト」の実施団体に決定した。本プロジェクトは、日本政府が今年度から5年間にわたり、アジア諸国で日本語を学ぶ意欲のある優秀な高校生1,000人を日本全国の高校に招聘する奨学金事業である。

2017年6月5日に開催された国際交流会議「アジアの未来」において、安倍総理大臣がスピーチで「日本語を学ぶアジアの高校生たちに、10カ月、日本で暮らせる機会を提供します。規模は今後5年で1,000人」と発言した。

このスピーチをふまえて、本プロジェクトは、①アジア各国の高校生を半年～10カ月間招聘する、②留学生は、日本各地でホームステイや寮生活をしながら高校に通学する、③休日等を活用し、日本文化体験・地域交流行事への参加・国内企業でのインターンシップ等を体験するという3つの趣旨を持つ（図1参照）。

図1 アジア高校生架け橋プロジェクト 留学生の滞在形態



アジア諸国の高校生 1000人来日（5年間計）

実施にあたり、当協会は文部科学省・外務省や各国大使館そして経済産業省と連携し、アジア地域から奨学生を迎え入れる。半年～10カ月間にわたり、寮またはホストファミリー宅に滞在しながら全国の高校に通い、日本人高校生と交流を深めていく。初年度（2018年度）は、滞在期間を8月下旬から半年間とし、中国・韓国・モンゴル・タイ・カンボジア・ラオス・ミャンマー・ベトナム・マレーシア・フィリピン・インドネシア・スリランカ・インド・ネパール・パキスタン・ブータン・バングラデシュの17か国から計100人の留学生を受け入れる予定だ。

受入れ人数も段階的に増加する。2019年度及び2020年度は200人、2021年度及び2022年度は250人と、5年間で計1,000人の留学生を迎える計画である。

留学生の受入れ校（以下、ホストスクール）は、文部科学省「スーパーグローバルハイスクール（SGH）」¹の指定校・アソシエイト校を中心に、当協会と関係性を築いてきた高校や、本プロジェクトを機につながった高校の協力を得ながら、全国各地で展開していく。初年度の受入れ校は約60校を予定している²。

ではなぜ、当協会がアジア地域で100人の留学生を選定し、受入れを実現しうるのか。次項では、AFSの組織運営体制について説明したい。

AFSとは

AFSはニューヨーク市に国際本部を置き、世界60か国のパートナー組織が相互にネットワークを結ぶ、非営利組織である。前身は、第一次・第二次の両大戦中に欧州で傷病兵護送にあたったAmerican Field Service（アメリカ野戦奉仕団）にある。平和な世界の実現は、国や文化を超えた相互理解が肝要であるとし、1947年からアメリカ留学や交換留学を制度化したパイオニアと言える。現在、世界約100か国の間で、年間1万2,000人を超える人的交流を行っており、その活動は、約5万人の地域ボランティアが支えている。プログラムの推進は、異文化体験を通して世界の多様性を知ることこそ、他者理解や寛容性の原動力であるという信念に基づいている。

各国のAFSは、特定の政治・宗教に偏ることなく、それぞれの国で独立して組織運営にあたっている。高校生の交換留学事業を中心に、社会人・教師やボランティア等を対象にしたプログラムを開発し、幅広い年齢層へ異文化理解の機会を創出している。国際本部は、参加生の安全管理体制を整備し、パートナー国間の協力・連携の促進と、新たな参加国の活動育成も行う。加えて、全パートナー

¹ 高等学校等におけるグローバル・リーダー育成に資する教育を通して、生徒の社会課題に対する関心と深い教養、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付け、もって、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーの育成を図ることを目的とする。<http://www.sghc.jp/>

² 2018年6月26日現在

が守るべき国際ガイドラインを設定し、プログラム全体の質向上をはかるほか、国連SDGsのパートナーとして、目標4・目標16³の実現を目指している。

我が国におけるAFSは、1954年に第1期生8人をアメリカに派遣したことに始まる。翌年、帰国生を中心に日本支部が創立され、63年から年間受入プログラムがスタート。現在、日本から留学できる国は約40カ国、日本に受け入れる留学生の出身国は約45カ国である。2014年には60周年を迎え、日本でのプログラム参加人数は、3万8,821人にのぼる（受入者数1万7,996人、派遣者数2万825人、2017年現在）。

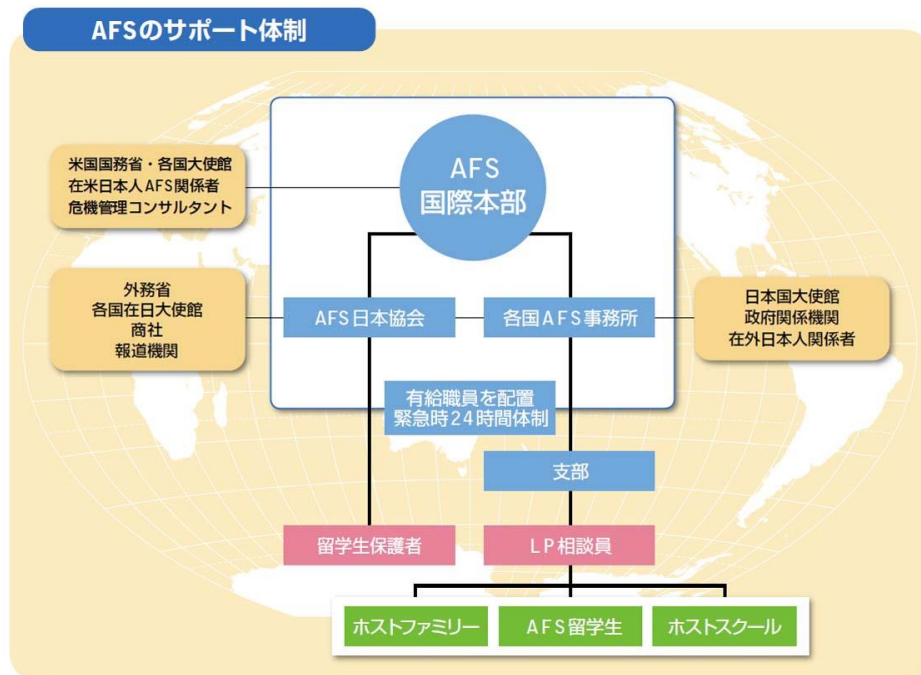


図2 AFSのサポート体制

アジア地域には、当協会のほかに6つのパートナー国がある（インド・インドネシア・タイ・中国・フィリピン・マレーシア）。本プログラムでは、これらパートナー国に加えて、従来の事業でネットワークを構築した国々も参加する。アジア各国での奨学生募集にあたっては、外務省や各国大使館の協力を得て、選考にあたる。選考を経た候補生は、当協会AFS国際本部とともに有機的な協働関係を築いている（図2参照）。

³ 目標4：すべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する／目標16：持続可能な開発に向けて平和で包摂的な社会を推進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供するとともに、あらゆるレベルにおいて効果的で責任ある包摂的な制度を構築する【参考】グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパン <http://www.ungcjn.org/>

日本協会には、全国に76の地域支部と4つの学生部が存在する。約1,500人のボランティアが地域ごとに活動を行い、日本の高校生の海外派遣・海外からの留学生受入れの双方を担う。留学生受入れ事業における地域支部の主な役割は、来日前～帰国時まで大きく分けて3つあり、ホストファミリー探し・行事企画など、留学生の滞在や適応プロセスを見守る（図3参照）。

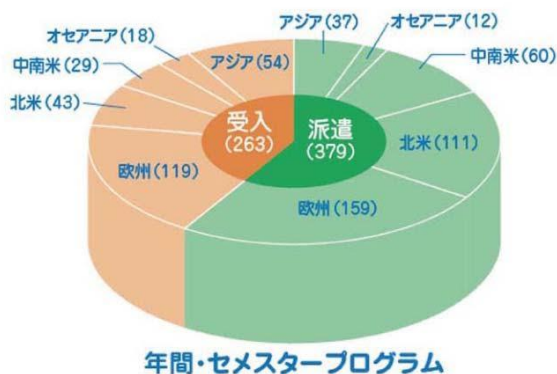
ボランティアの職業や生活背景も多様である。かつて海外に派遣された帰国生・帰国生の親、留学生の元ホストファミリー、ホストスクールの教職員、全国各地の大学生、主婦・自営業者、専門職（医師・弁護士等）、企業・教育機関の退職者、当法人の元職員などで構成される。AFSのプログラムは、約60カ国の受入家庭・学校・地域の人々のボランティア精神に支えられており、日本からの派遣生もまた、海外で同様のサポートを受けている。

今後の課題

AFSのグローバル・ネットワークを活用し、地域ボランティアによる運営基盤のもとで、今回の「アジア高校生架け橋プロジェクト」が実施される。他の留学プログラムと同様だと思われるかもしれないが、本プロジェクトは、他の新規事業同様、挑戦すべき課題を伴っている。

例年、当協会が実施する年間・セメスタープログラムの受入事業の参加者数は、約270人（50カ国）

図4 プログラム参加人数



派遣＝日本から海外へ留学する生徒、受入＝海外から日本へ留学する生徒

1. 来日前

- ・ホストスクール・ホストファミリー・受入寮を探し、訪問
- ・上記各所への連絡・調整・打ち合わせ
- ・世話役（リエゾン・パーソン）の選定

2. 来日後

- ・到着オリエンテーションの企画・運営
- ・ホストファミリーや寮への引率
- ・世話役による定期的な連絡・相談（留学生・ホストファミリー・ホストスクール・寮・AFSオフィス等）
- ・支部行事の企画・実施（交流会、中間オリエンテーション、異地域交流、研修旅行、お別れ会など）
- ・週末や長期休暇中のホストファミリー探し・家庭訪問

3. 帰国時

- ・お別れ会の企画・実施
- ・帰国便や帰国経路の伝達
- ・ホストファミリー・寮から集合場所への引率
- ・帰国前オリエンテーションの企画等

図3 留学生受入事業における地域支部の役割

である（図4参照）。2017年度の留学生受入プログラムの出身地域別参加人数は、欧州119人、アジア54人、北米43人、オセアニア18人、中南米29人であり、アジア以外の地域が約80%を占めている。今年度以降、アジア高校生架け橋プロジェクトの実施により、この構成比が大きく変化する。

本プロジェクトで100人を受入れることにより、アジア地域の受入構成比率は40%となる。



ホストファミリーと過ごす留学生

当協会では、留学生受入れや選考業務に携わる職員に加え、留学や海外在住・勤務経験をもつ専従職員をコーディネーターとして新たに雇用し、受入れ校・ホストファミリー・受入れ地域やボランティア間の連絡・調整業務にあっている。今後も業務拡大にあわせて、受入れ体制の強化をはかっていく。

アジア地域の多様性は、言語や文化だけではない。宗教を例にすると、仏教やキリスト教だけでなく、イスラム教やヒンズー教の戒律を守る生徒を、数十人単位で迎えることになる。日本で暮らす私たちから見ると、食に制限のある生徒が多く来日する。

ホストファミリーや寮での受入れにあたり、一番の課題となるのも食事である。イスラム圏やヒンズー圏から来日する生徒への反応として多いのは、「食制限に対応できるかどうか自信がない」「食卓では家族と同じものを食べてほしい」「寮ではハラール食や菜食への個別対応が困難」などの意見である。食の制限が、受入れの障壁となるケースだ。

私たちの活動は、言語・宗教・経済社会的な立場の違いをいかに乗り越えるかが、常に問われている。小さな試みとして、イスラムやヒンズー教徒の留学生を受け入れたホストファミリーの経験をもとに、ボランティアや職員の知恵・経験を集め、食事メニューの考案と受入れにあたってのQ&Aを作成している。

幸いなことに、留学生の国や地域を問わず、受入れを快諾される学校もある。先日も、ある私立高校の校長から「信仰をもつ高校として、異なる信仰を持つ生徒をむしろ歓迎する」という声をいただいた。離島から受入れ打診の電話が寄せられることもあり、地域の学校・NPOや自治体等のローカルなニーズが、アジア地域へのグローバルな理解につながっているのだと新たな気づき・発見を頂く思いである。

おわりに

2017年10月、ガーナのアクラで開催されたAFS国際総会（ネットワーク会議）において、AFSの立場と役割を国際社会に示す「アクラ宣言」が発表され、同総会に出席した世界120のAFS代表者が署名を行った。この宣言で、AFSは「公正で平和な世界を実現させる唯一の道は、国際社会が多様性を尊重し、寛大な姿勢を大切にし、互いに協力して喫緊の課題に取り組むことである」と訴えている。

当協会が行う事業は、全ての国と文化にそれぞれの尊厳と価値があることを前提とする。本プロジェクトを受託した最大の理由も、互いの国に精通した未来のリーダーや架け橋となる人材の育成を目指すという事業目標にある。

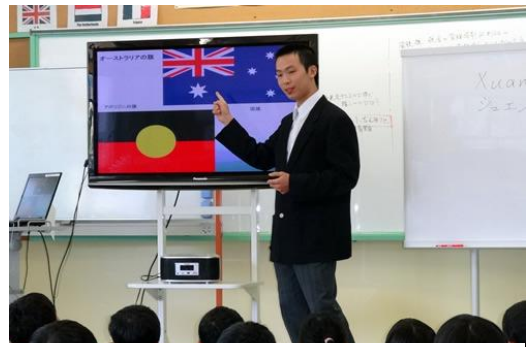
本プロジェクト参加者の応募選考書類を読むと、ある山岳地域の生徒は「家では牛を13頭飼っている。放課後は、姉妹で牛の世話をする。牛は私たちのライフラインであり、家族である」。別の生徒は「将来は、母国の女性が安心して

外出できるよう、政治家になりたい。安全な日本での滞在は、きっと役に立つだろう」と記してある。別の生徒の応募動機には「地域に、海外留学から帰ってきた年上のお姉さんがいた。留学体験を何度も聞くうち、海外への関心が芽生えた。何よりも、自信をもって語る彼女の姿は、留学前と比べて人間性も異なって見えた。自分もそうになりたい」とある。

当協会のボランティアが活動する意義も、留学生の成長や周囲に与えるインパクトを見守ることにある。日本の文化に不慣れでたどたどしい日本語を話していた留学生が、半年後には、日本での生活を通して、もうひとつの文化を理解する。母国を相対的に捉えられるようになり、自信をもって自らの考えを語るようになる。

一人の留学生を受け入れることは、地域で多くの方々力を借りることでもある。受入れ校の教職員・生徒、寮やホストファミリーそしてボランティアが、日常的に留学生の成長に立ち会っている。慣れてくると、留学生との間で小さな衝突が起きることもある。そのような場面では、留学生・受入れ校・ホストファミリーと定期的なコンタクトをとるリエゾン・パーソンが間に入り、仲介役として意見の違いを調整し、誤解を解く役割を担う。留学生の異文化体験は、当初は周囲にも戸惑いをもたらすかもしれない。しかし、やがて「ちがっていても、理解できる」「出会えてよかった」という充実感をもたらす。留学生の滞在は、地域のサポーターにとっても、異文化体験の旅となる。

さらに、この旅は、留学終了後も続くことがある。留学生の姿を見て、自分も留学したいと願い、海外へ旅立つ生徒もいる。来日当初ホームシックで泣いていた生徒が、帰国後は、来日を控えた別の留学生の世話役になる。数年後、インターンや社会人として、再び日本にやってくることもある。ホストファミリーが留学生の母国を訪れ、家族ぐるみで付き合いようになるなど、一人の留学生の異文化体験は、一人の成果に終結しない。その成長を見守るボランティア、家族、寮、学校や日本の生徒たちもまた、遠いようで近いアジアの国の異文化を体験し、プロジェクトに参加していると言えよう。



小学生に自国の紹介をする留学生



帰国する留学生のために行われた、手作りの卒業式

帰国する留学生のために行われた、手作りの卒業式

母国で成績優秀だった生徒が来日するだけに、留学生の存在は、ホストスクールの生徒にもインパクトをもたらすだろう。英語の運用能力の高さ、授業中の質問力、グループワークでの発言力、自身の考えを伝えるプレゼンテーション能力。日ごとに上手になる留学生の日本語運用能力からも、高校時代は新しい語学に対する吸収力が高いことに気づくだろう。教室で留学生と交わす何気ない会話からも、海の向こうに異なる生活様式や教育制度があることを理解するだろう。私たちは、留学生の積極性が、日本の高校生にもよき影響を与えると確信している。

留学生が学ぶ教室に40人のクラスメートがいるとすれば、留学生がもたらすインパクトは、5年間で $40人 \times 1,000人 = 40,000人$ となる。この中に、アジアへ関心を持つ生徒や、いずれ自分も海外に留学したいと願う生徒が出ることを願っている。

本プロジェクトに期待される主な効果として、①海外の高校生が、日本で教育を受ける体験をするとともに、文化を受入れて理解する、②日本の高校生が、国内にいながら日常的に国際交流を深めるとともに、異文化からの学びを経験できる、③受入れ校や地域で、留学生が文化紹介等を行うことで、地域への貢献につながる——の3点が挙げられる。

母国で成績優秀だった生徒が来日するだけに、留学生の存在は、ホストスクールの生徒にもイン